

小学校英語教育に思う

教育システム研究開発センター長 内田 聖二（文学部教授）

昨年7月29日に宇都宮大学で行われた「小学校英語教育学会」のシンポジウム「小学校英語と中学校英語教育の接続を成功させるための要件を問う」の会場は立ち見が出るほどの盛況であった。当時はすぐにでも小学校に英語が必修として導入されるのではないかとといった報道もあり、その関心の高さがそのまま出席人数に反映していたのである。

このシンポジウムの会場には小学校の先生方が多かったと思われるが、その会場から出た意見のなかでおおかたの賛同を得たことが二つある。ひとつは、現場の先生方の不安である。つまり、小学校の先生方は英語教育の専門家ではないということである。仮にネイティブ・スピーカーの教師が各クラスについたとしても、その教師に任せてもよいのか、あるいは自分も参加するのか。参加する場合は、その *team teaching* はどのような形態になるのか。等々、質問というか、深刻な悩みが次々と出た。これは今岐路に立たされている総合的な学習が導入される前段階と様相が酷似している。不十分な準備態勢のまま突入した総合的な学習は教育現場で未消化のまま実施され、結局は似ても似つかぬ「総合的な学習」が大勢を占めるのが現況であることは漏れ伝わってくる。英語の場合は、教科としてまったく異質ゆえ、より不安が増大するのであろう。

もうひとつは、評価にかかわることである。英語を教科として導入するということは、期末に評価をしなければならないという必然性を伴うことになる。これは中学校入試での受験科目化につながり、さらに、今でもたくさん英語嫌いが存在することに加え、小学校から英語嫌いをくり出すことになりはしないかとの大きな懸念材料にかかわってくるのである。

現行でも、周知のように、「総合的な学習の時間」のなかで「国際理解」の学習活動は可能で、現在小学校で実践されている事例はこの枠を用いて「英語活動」を行っている。単にゲームや歌を導入している事例が多いと思われるが、「国際理解」という視点からは英語を通じて日本語を再認識させるというフィードバックが求められ

るべきである。当たり前と思っている日本語の表現を英語ではどうなっていて、なぜなのか、を考えさせることに意義があるのである。

これは人間であれば当然と思われる認知の側面にも関連するもので、小学校の子どもに緑色を見せるともちろん「緑」と答えるが、ひとたび同じ色を信号機の図式のなかで見せると、「青」と言う。そこを端緒として、英語ではいずれの場合も *green* と言うということがわかれば、それはことばに興味をもつよい動機付けとなろう。また、太平洋中心の世界地図と大西洋中心の世界地図を念頭におきながら、よく耳にする、「極東」「東南アジア」「中東」などの方角に関する地名を考えさせることによって、西洋中心のものの考え方が浸透していることが小学生にも無理なく理解可能と思われる。

重要なのは、「英語の学習」は、コミュニケーションというより高い視座のもとに、母語教育ももちろん取り込んだ、言語教育の一環である、という基本的な位置づけを確認することであろう。そこでは、やはり日本語の特徴をしっかりと理解している日本人教師が中心となることが望ましく、ネイティブ・スピーカーには特化した役割を期待すべきである。

もうひとつ、付け加えておかなければならないことは、「中学校英語の先取りにはならない」というテーゼである。「先取り」の方向に進むと先の「英語嫌い」の子どもがさらに増えるであろうし、「受験英語」にますます傾く恐れがある。「中学校英語の先取りにはならない」ということを逆手に取って、現行の中学校には欠けている言語材料、例えば、衣食住にかかわる日常語や母語話者なら知らない者はいない幼児語など、を意識的に導入するのは、意味のある試みとなろう。

親の立場から単純に考えると、小学校から英語が教えられれば、大学までの10数年間にも及ぶ英語教育でも英語を話すことのできない現状を打破し、英語を自由に操ることのできる学生を輩出することができると、期待しがちである。このような、親たちの反省にも似た、短絡的な発想からの「英語が話せる日本人」ではなく、英語

だけではなく、広く外国語を通じての「国際理解」教育から生まれる、問題意識をもった視野の広い子どもたち

を育むことが、国際的に活躍する日本人を育成するために重要なことではないだろうか。

奈良女子大学附属幼稚園・小学校 共同研究会

今年度、3附属校園は、文科省より「幼・小・中等15年間にわたり、事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で『ねばり強い』思考能力を育成する教育課程の開発」を課題に、研究開発指定校に指定された(以下「研究開発」)。それを受け、附属幼稚園と附属小学校は、2006年2月15日(木)と16日(金)に、共同で学習研究発表会・公開保育を開催した。両日合わせ、約1000人もの参加者があり、熱心に研究協議等を行った。また、15日の幼稚園における分科会は、奈良女子大学教育システム研究開発センター員である大学教員の司会により、3附属校園の教師の提案、意見交換などが行われ、大学と3附属校園の協力をアピールする機会にもなった。

1. 附属小学校(学習研究発表会・講演)

附属小学校では、15日と16日の両日、学習研究発表会を開催した。一日目の研究発表会では、午前中は全学級の公開学習とその協議会を持ち、午後からは「PISA型学力と奈良の学習法」についてのシンポジウムを開催した。中垣真紀氏(ベネッセ教育研究開発センター研究員)、小西豊文氏(芦屋大学助教授)、渡辺邦彦氏(三田市立広野小学校元校長)をシンポジストとして迎え、わが校の学習法で育つ子どもの姿と、今言われているPISA型学力の目指している力は、同じ方向性にあるのではないかということを明らかにした。

二日目も公開学習を全学級で開き、午後からは、言語的、社会的、数理的、科学的、芸術的、体育的、家庭生活的の各分科会で、学びのすじ道や表現力や読解力など、子



どもを育てる確かな学びや、確かな力を培う学習法について、参会者の先生方と意見を交流した。二日目の最後の講演では、小学校の副校長の中谷内政之が「今、奈良の学習法は」と題して、学習法が成立してきた大正期からの経過を話し、現代における学習法の価値について話した。

2. 附属幼稚園(公開保育・全体会・講演・分科会)

附属幼稚園では、15日の午前に、公開保育と全体会を行った。全体会では、研究開発指定校1年目の取り組みを報告した。奈良女子大学の久米学長も臨席くださり、挨拶をいただいた。

午後からは、分科会と講演を行った。講演では、「遊びの中での学び」というテーマで東京成徳大学(元国立教育政策研究所教育課程調査官)の神長美津子先生にお話いただいた。小学校入学前の幼児教育に期待されていることや遊びの中で学びを捉える教師の力など、小学校と連携を進める上でも大切なことをご示唆頂けた。分科会は、3附属校園による「研究開発」を象徴する企画である。4つの分科会が開かれた。以下、その内容を簡単に報告しておく。

《分科会A 一幼稚園での学びを考えるー》

提 案 辻岡 美希(幼) 八田 智美(幼)
 阪本 一英(小)
 指導助言 松本 健義氏(上越教育大学学校教育
 学部助教授)
 司 会 本山 方子(本学文学部助教授)

日頃の保育でのエピソードの中から、「色水遊び」について取り上げ、各年齢ごとの学びや色水遊び・自然物に関わる意味について、小学校の阪本先生からは低学年での体験学習が学習意欲につながるということをご提案した。

指導助言者の松本先生からは、モノに主体的に関わって、自分にとって意味のあるものに作り変える時に学びになること、周りの人と一緒に体験することで互いの世界を共有し「知」につながることをお話いただいた

《分科会B ー学力を支えるコミュニケーションを考えるー》

提 案 飯島 貴子 (幼) 加藤 菜穂 (幼)
 谷岡 義高 (小) 荒木 由弥 (中等)
 指導助言 森脇 健夫氏 (三重大学教育学部教授)
 司 会 西村 拓生 (本学文学部助教授)

幼稚園の学級全体活動での話し合う場面における言語発達過程と、小学校・中等教育学校の児童・生徒の現状を発表した。コミュニケーション力の低下を起こしている背景を考え、学校教育ができることは何か、その中で特に、幼児期に大切にしておくことは何か、言語を含めた表現として考えることが必要であると指導助言を頂いた。

《分科会D ー幼稚園から小学校への育ちを考える(個人追跡)ー》

提 案 松田 登紀 (幼) 堀本 三和子 (小)
 指導助言 岡本 夏木氏 (元京都女子大学教授)
 麻生 武氏 (本学人間文化研究所教授)
 司 会 天ヶ瀬 正博 (本学文学部助教授)

附属幼稚園から附属小学校へ進学した子どもを対象に、その育ちを追い、幼稚園教師が捉えた姿、小学校教師が捉えた姿を伝え合った。その中で、共通の視点や、それをどのような言葉で表すのかを探った。幼稚園から小学校への移行期間に必要な、また長期的に子どもの発達をとらえるために、必要な教師の視点について指導助言を受けた。

《分科会C ー異校種間連携を考えるー》

提 案 柿元 みはる (幼) 竹内 愛 (幼)
 日和佐 尚 (小) 野上 朋子 (中等)
 指導助言 奈須 正裕氏 (上智大学総合人間科学部教授)
 司 会 浜田 寿美男氏 (本学文学部教授)

7月に行った中等教育学校サイエンス研究会が小学校・幼稚園で行った「かがくのひろば」の実践例を中心に、子どもの学びや、その後の様子を発表した。指導助言者の奈須先生からは、他校種の教育との違いをわかることで、当たり前のように行ってきた自分の教育を再確認すること、そこで根拠のないものがあれば、他校種から学び取りながら、もう一度その意味を考えることが大事なのではないかという指導助言を受けた。



附属学校園「研究開発学校」研修会・シンポジウム「ものろじーな子どもはどう育つか」

附属学校園では、3校園合同主催、当センターの共催で「ものろじーな子どもはどう育つか」と題して下記の要領で研修会を行いました。

《日時》 2006年8月29日 (火)

《場所》 本学G202

《話題提供》

和田 恵次氏 (本学理学部教授)

植野 洋志氏 (本学生活環境学部教授・附属中等教育学校長)

《コメント》

麻生 武氏 (本学人間文化研究科教授)

中島 道男氏 (本学文学部教授・前附属幼稚園長)

はじめに水上戴子附属学校部長より挨拶があり、引き続いて話題提供者の講話をいただきました。

和田先生は附属中等教育学校の「サイエンス夏の学校」では「カニの先生」としておなじみです。ご研究の成果として、新種のカニを発見されたこと、カニが「嫌がらせ行動」をすることを見いだされたことをご紹介いただきました。和田先生の研究スタイルは「自然現象から新しいものをみつけ、それを説明する」であり、ベースはものごとを徹底的に見ることにあるということ。カニの様々な発見も6年間にわたりカニを観察する中で、カニのダンスの違いをみつけたことや、研究的視野から一歩おいたところでカニをながめているうちに気づいたことなどを述べられました。この先生のスタイルのきっかけ

になったこととして、小学4年生時のエピソードが紹介されました。小学4年生の時の夏休みの宿題であった「季節だより」がおそらく1年間続けたら担任の先生にほめられ、それが自信になったこと。次は、昆虫採集にのめり込み、中高では生物クラブで昆虫の研究をつづけ、カメノコハムシがお尻に自分の糞をつけて脱皮の際に役立てていることを発見したりもされたそうです。対象に対するねばり強い観察の姿勢が今の先生のご研究の基本になっているということ、その姿勢が子ども時代に育まれたと言うことをお話しいただきました。植野先生は附属中等教育学校では「タンパク質が大好きな校長先生」です。生徒への講話では必ずタンパク質のお話をしてください。

植野先生が科学に興味を持たれたきっかけは中学時代の伯父様の影響が大きいということでしたが、植野先生ご自身は子どものころの興味は、彫刻、法律、音楽など非常に多岐にわたっていたそうです。そのような中、伯父様との交流、お父様との関わりなどを経ながら、その興味は理数系、理論物理から生命科学、そして、タンパク質へと変化していかれたということでした。先生は、大学卒業後アメリカに留学されましたが、アメリカの大学院では、単に「知識を教える」のではなく「考えることを教える」スタイルであったこと。人生においてよい友達、よい先生方にめぐまれて今のご自身があるということをお話しいただきました。

中島先生は附属幼稚園の前園長先生ですが、和田先生のお話から「自然の体感・体得」といえキーワードを取り上げ、附属幼稚園、小学校周辺の豊かな自然を環境としてどう生かしたらよいかという問題提起をしていただきました。また、研究開発については「じっくりとことん観察」のあとの「表現力」が重要なテーマであることもお話しいただきました。

麻生先生には発達心理学のご専門の見地から「9歳の壁」

という言葉をお話しいただきました。いろいろなことで節目になる年齢が9歳付近であるということ。そして、このことは和田先生のお話にも当てはまることをご指摘いただきました。麻生先生はキーワードとして「限定とひろがり」「学ぶ力と教える力」をあげ、さまざまに広がった興味が限定していくときに、ほめられ、自信がつくと成長がうながされること、子どもには「学ぶ力」があるのに「教える」が過剰になっている現状であること。大切なことはいかに教えるかと言うよりもいかに「学ぶか」ということ。「附属は教えるのはやめました」というコンセプトを持つぐらいでもよいと、少々扇情的なコメントもいただきました。休憩の間は、和田先生のお持ち頂いた40年前・・・といっても少しも輝きの衰えない見事な昆虫標本の披露に参会者一同驚きに包まれた後、活発な意見交流が行われました。

大学の先生方の研究を支える生き立ちに触れることができ、この研究開発で私たちはどのような子どもを育てていこうとしているのかを、大いに考えることができた一日でした。

(文責 荒木ユミ・附属中等教育学校)



奈良女子大学教育システム研究開発センター Newsletter 06

2007年3月発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

〒630-8506 奈良市北魚屋西町

奈良女子大学 H棟505 TEL0742-20-3352

Web <http://www.crades.nara-wu.ac.jp/>

mail crades@cc.nara-wu.ac.jp